

特別寄稿

I R (Institutional Research) って何でしょう？

山形大学

学術研究院教授 (I R担当) 藤原宏司

筆者は、フロリダ州立大学の大学院で I R (Institutional Research) について学び、ミネソタ州立大学機構ベミジ州立大学 (BSU) およびノースウェスト技術短期大学 (NTC) で I R と I E (Institutional Effectiveness) を実践した後、2016年8月に、山形大学の I R 担当者として着任しました。

米国の I R 担当者間で有名な笑い話として、「I R 担当者にとって最も難しいことは、自分の仕事について説明することだ」というのがあります。筆者も、BSU/NTC に就職が決まったことを両親に報告した際、「I R 担当者って何をやるの？」と聞かれ、困った経験を持っています。皆さんだったら、どう説明されますか？

現在、日米で広く受け入れられている I R の定義は、「I R とは、教育研究を含む大学経営における意思決定の支援機能である」と要約できます。しかし、この定義はあまりにも抽象的すぎるため、I R の専門家以外には残念ながら理解できません。「意思決定を支援している人」と言われてもイメージできないと思います。

筆者の BSU/NTC 時代の上司である Douglas Olney 博士は、I R 担当者を「データに関する何でも屋」と良く例えていました。日本の大学では、「〇〇 I R」のような、扱うデータを制限して活動する I R の形態が見られます。他方、米国における I R 部署では、学内外における様々なデータが分析の対象です。退学者の予測モデル構築と並行作業で教育プログラムのコストパフォーマンス計測用 KPI (Key Performance Indicators) を開発したり、雇用者アンケートの分析レポートを提出した翌日に、教室の稼働率・充足率に関するプレゼンテーションをしたりと、実に幅広い I R 活動を展開しています。データがある所には、必ず I R の仕事がある。このような感覚で業務を行っていました。

筆者は、2013年11月に、日本における講演の機会をはじめて得ました (大学評価コンソーシアム勉強会「米国における I R 実践を通して考える日本型 I R」)。その時にお話したことと重複するのですが、I R 部署の基本的な役割は、大学における「データの総合案内所」になることだと考えています。I R 担当者は、そこで働くデータの案内人です。この考えは当時から変わっていません。データに関して知りたいことや分からないことがあったら、まずは I R 部署に聞いてみる。このような信頼を学内から得ることが、その大学における I R 部署がやるべき第一歩だと思うのです。

山形大学における I R 部署は、上記のような「データの総合案内所」を目指しています。そのためには、大学を取り巻く多様なデータに精通する必要があります。現在は、公開データを含む大学データを可能な限り I R 部署に収集・集約して、山形大学の現状を分かりやすく可視化することを第一のミッションとしながら、学内外のデータについて勉強しています。終わりは見えませんが、このような基本の積み重ねが学内からの信頼を育み、「意思決定の支援」に繋がっていくのではないのでしょうか。